

ural Design Studio: I

エコロジカルな暮らしの構築

Ecological Livelihood with nal Bath in OGIJIMA, Seto

> Norihisa KAWASHIMA [Assistant Prof.] Furninori NOUSAKU [Assistant Prof.]

Yoshiharu TSUKAMOTO

David B.STEWART

Taisuke YAMAZAK

Koichi YASUDA

建築はいかに自然/都市とつながるか? 瀬戸内・男木島におけるケーススタディ

共同風呂を起点とした

川島範久 [助牧]

能作文德[助救]

安田幸一〔釣拶〕

塚本由晴[教授]

山崎鯛介[准教授]

デイヴィッド・ スチュワート[特任教授]

054

la_042 design je



大学院

> **提出物** 配置図1/500 |平面図、断面図1/500 |模 型1/500 |バースなど



課題主旨 建築は、太陽の光や熱、大気の流れ、雨などの自然現象、森林資源・鉱物資源な どの自然資源、人間の手によって加工された様々な人工物、水道・ガス・電気のインフラに繋 がっている。地球環境問題が深刻化し建築においてサスティナビリティやエコロジーへの配 慮が叫ばれるようになり、建築はいかに自然や都市と繋がるかが、ますます問われるようになっ てきている。このような時代に生きる建築家は、個々の日常的活動が地球や未来の世代に対 する責任を帯びていることを自覚しなければならない。そして学生たちとこうした問題を共有する ことが重要なテーマのひとつだ。しかし、資源やエネルギーがどこから調達されているのか、どの ようなプロセスを経て届けられているのかを意識しなくても私たちの生活が送れるように整備さ れている。そのためエコロジーについて、頭では分かっていても、その重要性をリアリティを伴って 実感することが難しくなっている。そこで本課題は、都市のような政治や経済の中心ではなく、 離島という周縁から建築と暮らしを考えて組み立てる試みとした。瀬戸内の島のひとつである男 木島をケーススタディに、瀬戸内海に沈む夕日を眺められる庭と土壁の既存納屋のある敷地に 「エコロジカルな暮らし」を構築するための場を提案する。男木島のエネルギーインフラは現 在は本土(高松)からの供給で成立しているものの、少子高齢化・過疎化により将来的に維持 が困難になることが予想される。集落は急な斜面地にあり、多くの道は狭く急な坂道で、階段 状の道も多く、ほとんどの道は一般車両が通行不可だ。そのため、小さな敷地における設計 課題でありながら、エネルギー・水、温熱・光・風環境、マテリアル・構法・施工、ライフスタイル・ コミュニティ、景観といった多角的な視点からのリサーチとデザインが求められた。その後、この 課題は現地におけるワークショップに発展し、分野横断的な新たなサスティナブルデザイン教 育またはエコロジー教育の一環として展開されている。 [川島範久、能作文徳]

SJIGNMENT Architecture is connected to natural phenomena such as sunlight, there, wind on this parallel assources obtained from the forsts and minerals. Also, artifacts built by human ands and the infrastructure needed for supplying water, gas and electricity services are directly monected to architecture. As the awareness on global environmental issues become more relevant onsidentrations for sustainability and ecology in architecture has progressively arose. Therefore, would be avareness on the even the individual dualy activities have a direct effect on nature hence the future. However, as our surroundings are highly developed, people do not cognize where the resources and the energy used in daily life are produced and what processes the carried out to do so. For that reason, even if we know the importance of ecology and its fifter on our lives, it is becoming difficult due to the actual developments to recognize its real elevance. In this assignment, we encouraged the students to think about the architecture and levance, and architecture people can see the beautiful surrous on the Sectonki sag, as it exactive to propose an "ecological lifestyle". Even though Ogjima's energy infrastructure is stranged with supply from the maintaind (Takamatus), it is expected that it will be difficult to astain the city in the future. However, as survey and a stranged by the structures and approximation of the strange provide an attracture and a depopulation. It will be indired to a step to going and the architecture and the village is located on a steps thoring land, many routs are narrow or strankes. And so it is mavailable for general whiches to pass through. For that reason, despite the limited dimensions the village is located on a steps thoring and, many routs are narrow or strankes level, and so it is mavailable for general whiches to pass through. For that reason, despite the limited dimensions inverticed and steps thorized and the design proposals form an unultifacetor perspective.

truction materials, construction method, construction processes, lifestyle, community mics, landscape and so on. [梁正田真面 M1]



概要 今回で第15回目となる本ワークショップは、同済大学、東南大学、華南理工大学、本学の 合同ワークショップとして行われた。課題は、中国における少数民族である侗(Dong)族が住む地 捫(Dimen)村における、小学校を核とした公共施設の再編計画である。貴州省の少数民族 自治区に位置する地捫村には、谷状の土地に流れる河川に沿って村民自ら建設した伝統的な 木造住居が密集し、今でも村民は自給自足の生活を営んている。一方て、自動車や近代的な 建材の導入によって、新しく造られた車道と従来の路地が交差し交通の問題が発生する、従 来の広場が建材置き場として占拠され公共空間が減少する、コンクリート造の住居が建てられ 伝統的な街並みが壊される、など様々な問題を抱え、村は徐々に従来のそれとは姿を変えてき ている。新技術の導入による利便性と、地理条件に応答した伝統的な村の生活とがせめぎ合 うこの村の公共施設を再編し、これらの共存を図りつつ、公共施設の諸問題を改善することが 本課題では求められた。また、観光、研究などの目的で村を訪れる村外の人々と、村で生活す る人々との関係について考慮することも本課題の重要なテーマであった。今なお伝統的な暮らし を営む少数民族の村の中心部に、村外の人々も利用する公共施設を設計するため、その公共 施設における、互いに文化や生活環境の異なる人々同士の関わりをどのように想像するか、ある いは伝統的な街並みをどのように尊重し提案を行うかなど、設計者として、文化や歴史に対す る認識や立場を強く自覚させられる課題であった。2017年11月下旬の2週間の滞在のうち、 最初の4日間は本ワークショップに参加する学生と教員で地捫村を訪れ、現地住民の生活 や建物を直に体験し、その後上海に戻り、同済大学の製図室で設計作業と講評を行った。 設計作業は各大学の学生を混成し、5-6人で構成された8グループによるグループワークで行 われた。設計にあたっては、各グループが地捫村でのフィールドワークで観察した内容を基に設 計のコンセプトを明確なキーワードとして言語化し、それを基に設計の方向性や目的を共有して 設計活動を行う、といったプロセスで進められた。4回の講評会やその間のエスキスでは、各自 のキーワードや、それを基にした具体的な設計案への展開について多くの議論を重ねた。初期 の議論では、村の生活と公共施設の関係を再構成するためのマスタープランを重視し、その後 公共施設の建築的なあり方をより詳細に議論した。 設計作業以外では、上海滞在中の1日 を利用して、上海近郊の水郷街である同里を訪れ、運河と共生する町並みを見学した。他にも、 ワークショップ中に上海の建築や町並み、観光地を訪れ、建築だけでなく中国の文化や暮らし を直に体験することができた。2018年2月下旬には中国の教員、学生を東京に招き、本学の 教員を交えて最終講評を行った。この期間中に彼らに東京を案内し、設計作業以外でもお互 いの背景や考え方をより詳細に共有、議論することができた。短期間ではあったが、中国の都 市部だけでなく、少数民族の住む地方も訪れ、中国の都市、建築、生活について知り、中国人 学生との共同設計を通してお互いの歴史や建築に対する多様な思考を共有できた、密度の濃 い2週間であった。 [内藤祐輔 M2]

ASSIGNMENT Tongji Univ., South East Univ., South China Univ. of Tech, and Tokyo Tech held a joint workshop from 14 ch-28 th Norenber in China. The final presentation was held in Tokyo Tech on 26 ch February 8 groups callabareted on regeneration of public center in Dimen village. Dimen village is the village self-governed by Chinese minority, Dong people.







微純

up D: Powered by Ogiji



Group E: Sexy Bathroom Yushiro YAMANAKA Masaya FLUI

大学院建築意匠設計/第二 Gradua

完建築意匠設計/第一 Gr



Group G: Smoke Haven Masato SHODA, Akira SHINOHARA, Ryutaro SHIMIZU, SHUAN Lee, LEI Guo



se: Architectural Design Studio: II

- 貴州・地打村再編計画 Read







Keite MORIVAMA, Sole TANOLE, Himki MATSUSHIMA, LILLViei, LILLVie, EENG



to SHODA, Yuki SATO, Ryota FUKATSU, WANG Wei, ZHANG Xiat



usuke NAITO, Hirowski GONDO, Kenta MINAMI, WANG Chonows, HE Xinran, ZHU Yi



am 7: Sustaining Nodes





Team 4: Tree Marina OUCHI, Susumu SHIMAZU, Yushiro YAMANAKA, LI Meng, HUANG Shuyi



Shoei SAITO, Yui HASEGAWA, Himki SEKIKAWA, MA Villion 111 M-



Team 8: Middle Space

Pp

ka_0.42 annual 2